

現代の ことば

伊藤 謙介



金子みすゞの生誕100周年を記念して、観谷大学響都ホールで、多くのみすゞファンが集い、「金子みすゞトーク」が開催された。主宰するのは、童謡詩人で金子みすゞ記念館館長の矢崎節夫氏である。

矢崎氏は、大学1年生のとき、金子みすゞの「大漁」という詩に出会った。衝撃を受け、以来みすゞの詩を探索する。16年の後、詩人の弟から、51歳の編の詩が遺された手帳を託される。そして、矢崎氏の手により、1984年「金子みすゞ全集」が出版され、埋もれていた童謡詩人が、現代に甦った。

やさしく 深い真理がある

大している。矢崎氏の願いは、「一家に一冊の金子みすゞ詩集」。その思いは、30年のときを経て叶えられつつある。東日本大震災直後のテレビCMの記憶は、今も鮮明である。また、みすゞの詩は小学校の教科書にも採用されている。さらには世界11カ国語に翻訳され、グローバルにも広がっている。無名の詩人であった金子みすゞを、今や知らない人はほとんどいない。

金子みすゞの魅力とは何か。私も、あらためて全作品を読み返してみた。51歳の作品全てが、26歳で夭折を遂げるまで、わずか4年間でつくられたことに驚きを禁じ得ない。心を打った作品は数え切れないが、「雀のかあさん」という作品に強心ひかれた。子供が「子雀／＼かまえた。その子のかあさん／＼笑った。雀の／＼かあさん／＼それ見てお屋根で鳴かずに／＼それ見た。人間の傲慢さを鋭く指摘する」とともに、生命へのやさしいまなざし、生きとし生けるものへの憐憫に満ちている。

一方、現代はそんなみすゞの慈悲深きとは無縁である。生命あるものの「生き様」を尊重し、よごとはしない。それどころか、その存在さえ認めないかに思える。典型例が、我々の食料となる生き物への視点である。今、スーパーのバックに入った肉の切り身から、生きている牛も豚、鳥、魚などを連想する人は少ない。食材となり、切り刻まれた生命あるものへ、いささかなりとも感謝の思いを寄せることが必要ではないか。他者の生命を大切にしなければ、自分の生命をも大切にしなくなる。このことが、自殺大 国日本の根底にないだろうか。金子みすゞの詩は、そんな殺伐とした現代こそ、もっと多くの人に読まれていい。その全ての詩に、やさしく深い真理がある。

(京セラ顧問)